

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04197

研究課題名(和文)聴覚障害のある親と健聴の子どもの親子類型と支援モデルの検討

研究課題名(英文)A Typology of Parent-child Relations and Support Model in CODA and Deaf Parents.

研究代表者

中津 真美(Nakatsu, Mami)

東京大学・バリアフリー支援室・特任助教

研究者番号：90759995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：聴覚障害の親をもつ健聴の子ども(CODA)は、幼少期から親の通訳を担い、親を擁護する認識を継続させることから、親子の相互性と組み合わせの固有性により数例の親子関係が生じると考え、CODA親子57組を対象に、親子類型及び支援モデルを検討した。その結果、親子は「回避による自律傾向型」「親愛傾向型」「役割逆転型」の3類型に分類でき、各類型に關与する諸要因の解析から、役割逆転型においてよりヤングケアラーの様相が認められ、類型別の支援法及び聴覚障害の親の社会参加システム構築提言の基礎資料を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、CODA親子57組を対象に親子類型及び支援モデルを検討し、CODA親子の3類型と各類型別の支援法を明らかにした。親子関係の多様性に着目して、親子の相互性と組み合わせの固有性に分析視点を据え、各類型の特性に応じた支援の重要性を示した。特に、早期からの親教育の必要性が認められ、これまでわが国をはじめ国外でも皆無であった、CODAと聴覚障害の親に対する支援モデルを提言できた。本研究で示した親子関係の類型を念頭に、両者の関係の理解と個別的助言指導に関わる視点の重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Hearing children who have a parent with hearing impairment may continue to perceive the need to secure his/her parent by acting as an interpreter for the parent from their early age. The need for support to CODAs and their parents has been pointed out; however, the relationships are expected to vary depending on the parent-child pair involved. In this research, we explored the patterns of parent-child relationships and support models in 57 pairs of CODAs and their parents.

The results showed that parent-child relationships can be classified into 3 types: "the avoidance type," "the affinity type," and "the role reversal type." Analysis of the factors involved in each type revealed that the aspect of a young carer was the most noticeable in the role-reversal type. This research provides us with basic insight for making recommendations about ways to provide support for CODAs by the type of their relationship with their parents.

研究分野：聴覚障害学

キーワード：CODA 聴覚障害者 親子関係 ヤングケアラー 障害者家族 障害者支援 家族福祉

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、高度の聴覚障害のある児者の社会活動において、合理的配慮の観点から、通訳者派遣制度などの情報保障とコミュニケーション支援が整備されるようになった。しかし、聴覚障害のある人の家庭に関しては、幼少期から聴覚障害の親をもつ子ども (Children of Deaf Adults; CODA) が親の通訳を担う実態が知られている (Preston, 1994)。

CODA では、音声と併せて親との会話法である手話を獲得し、親の聞こえない聴覚情報を伝達するなど、通訳を担うことになる。CODA の通訳役割とは、CODA が親と第三者との間に立ち、双方の言葉を訳して相手方に伝え、さらに第三者の話す内容が親には理解しづらい場合には、分かりやすい言葉に言い換えたり解説を加えたりする役割が期待される。また、固有の価値観や行動様式をもつ親と聴者との間のギャップを認識し、仲介役となり、聴者との社会との窓口となる (渋谷, 2008)。すなわち CODA が担う通訳役割は、親を守らなければならない場面での心理的負担が大きく (Shingleton, 2000)、一方で聴覚障害のある親は、聴者社会の情報を有する CODA に様々な物事の決定を委ねる傾向にあり (Bunde, 1979)、親子の関係性は一層、複雑になることが推測される。

CODA の親子の関係性に関しては、CODA の通訳役割が適切な文脈の中でなされる場合には、その責務から成熟観や独立心が促され、CODA の成長の促進要因となり、両親との緊密な関係の構築も進む一方で、通訳が子どもでもある CODA にとって責任ある場面であれば、CODA は親を擁護し、parentified child (親のように振る舞う子ども) になってしまうであろうことが警告されている (Hadjikakou, 2009)。従って、親子に対する支援の要請は急務であると言えるが、国内外において資料の集積は十分ではない。

研究代表者は既に、聴覚障害のある親が子どもでもある CODA に抱く役割期待を基に、CODA と親それぞれの親子関係構造を明らかにした (科研費研究活動スタート支援 H. 27-H. 28)。CODA は、通訳を通して「親への積極的擁護」と「親の無力さによる不可避的擁護」の認識をもち、親は「CODA への被擁護」の認識をもつことが認められ、各々の認識がどのような要因に規定されているかを解析した。当研究により、CODA と親の双方の親子関係に係る全体構造を示すことができたが、次の段階として、親子関係の多様性に注目して、親子類型を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

前述のとおり、CODA は、幼少期から親の通訳を担い、子どもでありながら親を擁護する認識をもつことから、健聴の親子との関係性とは異なる親子の役割逆転関係 (role reversal) が生じる傾向にあることが認められた。従って CODA と親に対する支援の必要性が指摘されるが、その関係性は親子の組み合わせにより多様であることが想定され、親子の相互性と組み合わせの固有性に関する検討が求められる。

そこで本研究では、CODA と聴覚障害のある親の親子ペアを対象に、①親子を類型化し、②各親子類型について諸要因との関連を解析して特徴を明らかにした上で、③類型別の親子支援モデルを提示することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 対象

13 歳以上の CODA 57 名 (男性 19 名、女性 38 名：年齢平均 24.38 歳±8.65)、聴覚障害のある実親 57 名 (父親 19 名、母親 38 名：年齢平均 54.25 歳±8.71) の親子 57 組を対象とした。

(2) 質問紙の作成

質問紙は、CODA 調査用と親調査用との 2 種とした。CODA 調査は、I. 基本的属性、II. 通訳役通訳役割の実態、III. 心理的状況、IV. 親との関係性の編成とした。親調査は、I. 基本的属性、II. 心理的状況、III. CODA との関係性の編成として、親子の質問項目構成は可能な限り対応させた。評定項目は全て 5 件法を用い、24 歳以上の CODA の親子対象者へは、後方視的法にて回答を求める形式とした。質問項目は、CODA 調査、親調査ともに筆者らの先行研究で生成されたカテゴリまたは概念と既存の尺度を用いて独自作成し、聴覚障害学専門家 8 名で内容的妥当性を検討して確定した。CODA 調査は 72 項目、親調査は 45 項目とした。

(3) 実施方法

無記名自式質問紙調査および無記名 web 調査を実施した。調査には、REAS (リアルタイム評価システム：放送大学提供) を使用した。調査依頼は、①全国 47 都道府県の聴覚障害者団体を通じて聴覚障害のある親へ依頼し、親経由で CODA へも依頼 (無記名自記式質問紙調査)、②CODA のセルフヘルプグループを通じて CODA へ依頼し、CODA 経由で親へも依頼 (無記名 web 調査) する方法のほか、③機縁法 (無記名自式質問紙調査または無記名 web 調査) にて CODA および親へそれぞれ依頼した。なお、質問紙調査の郵送では、CODA と親それぞれの個別封筒を用いるよう求め、回答のバイヤスを回避した。

(4) 分析方法

親子の類型化では、質問項目のうち親子の関係性に係る項目を使用し、因子分析 (一般化最小

二乗法、プロマックス回転)、重回帰分析(ステップワイズ法)、階層的クラスター分析(Ward法)を用いて解析した。次いで、各親子類型と関連する要因について、親子類型を目的変数とし、親子の基本的属性、心理的状況、通訳状況、親子の会話状況の実態に係る項目を説明変数として、一元配置分散分析または二元配置分散分析を用いて解析した。

4. 研究成果

(1) 親子類型

親子の相互性と組み合わせの固有性に分析視点を据え、CODAと聴覚障害のある親の親子関係を類型化し、その個別性を検討した。階層的クラスター分析(Ward法)を用いて解析し、3類型による分類をCODAの親子関係類型として採用した(図)。

類型Iは、CODA側は親に対して積極的にも不可避的にも擁護する認識は薄く、親側もCODAに擁護される認識を有しない類型と解釈し、CODAが親から回避的に自律する関係性が窺われ、「I. 回避による自律傾向型」と命名した。類型IIは、CODA側は聴覚障害のある親を積極的に擁護する認識をもつが、親はCODAに擁護される認識を有しない類型と解釈し、CODAが親を前向きに守ろうとし、親側は自立の志向を示す関係性が窺われ、「II. 親愛傾向型」と命名した。類型IIIは、CODA側は親を積極的にも不可避的にも強く擁護する認識をもち、親側もCODAに擁護される認識を有する類型と解釈し「III. 役割逆転型」と命名した。各類型とも、19組の対象者の親子がそれぞれ該当した。

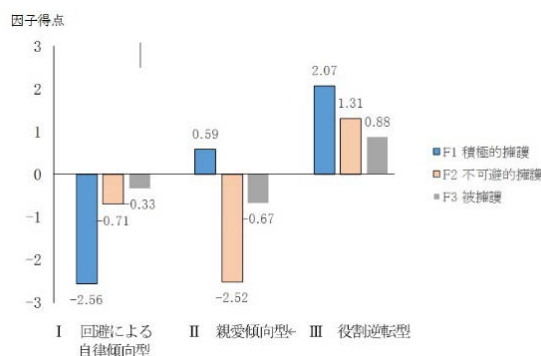


図 クラスター分析によるCODA親子関係の類型化

(2) 親子類型と関連する要因

CODAの親子関係3類型と諸要因との関連を解析した。具体的には、対象者の親子ペア57組を、「回避による自律傾向型」「親愛傾向型」「役割逆転型」に分類し(各類型ともn=19)、①基本的属性(性別、年代、同胞数、出生順位、親の聴覚障害)、②通訳状況(通訳開始年齢、通訳頻度)、③会話状況(会話法、親子の会話成立レベル)、④心理的状況の要因を用いて比較検討した。

①親子類型と基本的属性との検討では、役割逆転型は両親とも聴覚障害の場合が多く(p<.01)、回避による自律傾向型は父親または母親のみ聴覚障害の場合が多かった(p<.05)。②通訳状況では、通訳頻度において、役割逆転型がより高値を示し(p<.05)、通訳開始年齢でも、役割逆転型がより低年齢であった(p<.05)。従って、役割逆転型のCODAは、より早期から頻繁に親の通訳を担う傾向であることが窺えた。③一方、会話状況では、親子の会話法や会話成立レベルの要因と、親子類型との関連は認められなかった。④心理的状況は、CODA側では、回避による自律傾向型(p<.05)と役割逆転型(p<.01)のCODAの方が、親の障害に困惑し、さらに周囲から孤立する傾向であった。また、親愛傾向型のCODAの方が、より親の障害を受け入れている(p<.01)。親側では、回避による自律傾向型と親愛傾向型の親の方が、子育ての困惑・不安を有していた(p<.01)。また、役割逆転型の親の方が、障害に対する引け目を感じていた(p<.01)。

(3) 親子支援モデル

親子類型とその特徴を指標とし、①CODAへの直接的支援アプローチ、②聴覚障害の親への直接的支援アプローチ、③親子を取り巻く社会への理解促進のための間接的支援アプローチの3領域の視点をもって、親子支援モデルを事例的に分析して提案した。

「回避による自律傾向型」は、親子相互の回避的な自律傾向が認められ、特に親が子育てに自信をもつといった親への養育心理支援を充実させることで、親子の回避軽減を促す支援モデルを示した。「親愛傾向型」は、CODAは親の障害を受け入れ、親は自身の障害に引け目をもたない特徴を有し、主として親子コミュニケーション維持を重視した支援モデルを示した。「役割逆転型」は、CODAは親の期待に応えるべく通訳役割を過度に担い、親は子どもであるCODAに擁護される姿勢といった密着的な関係性が窺われ、最も支援を要する親子類型と考えられた。

CODAへは、親を擁護する認識を軽減させ、親へは、CODAの通訳役割と心理的状況に関する理解を促すアプローチとし、加えて聴覚障害者における社会参加システムの構築にも言及した。

以上により、CODAの親子支援に関して、親子の相互性と組み合わせの固有性に分析視点を据え、個人差に注目して類型化するという、より精緻な知見を新たに見出すことができた。CODAの成長過程に支援が必要な場合には、本研究で示した親子関係の類型を念頭に、両者の関係の理解と個別的助言指導に関わる視点の重要性が示唆された。この成果は、日本におけるCODAと親の支援方策構築に向けた第一歩を踏み出すものとする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nakatsu Mami, Hirota Eiko	4. 巻 63
2. 論文標題 This survey of Children of Deaf Adults (CODA) was conducted to determine their roles in Interpretation for Deaf Parents and related factors.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 AUDIOLOGY JAPAN	6. 最初と最後の頁 69～77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.4295/audiology.63.69	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中津真美, 廣田栄子
2. 発表標題 聴覚障害の親をもつ健聴の子ども(CODA)における 親子の会話状況と関連する要因の検討
3. 学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中津真美, 廣田栄子
2. 発表標題 聴覚障害のある親と健聴の子ども(CODA)による親の養育行動の検討
3. 学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣田栄子, 齋藤佐和, 大沼直紀, 中津真美ほか
2. 発表標題 わが国における聴覚障害児の早期診断・介入の実態と地域連携
3. 学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣田栄子, 大原重洋, 中津真美ほか
2. 発表標題 高齢期難聴者の聴覚障害による制約と参加に関する評価法の検討
3. 学会等名 日本聴覚医学会総会・学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中津真美, 廣田栄子
2. 発表標題 聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (CODA) による親への音支援の実態
3. 学会等名 日本音響学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中津真美, 廣田栄子
2. 発表標題 聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (CODA) の親に対する通訳役割の実態調査
3. 学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中津真美
2. 発表標題 病や障害とともに生きる看護職の活用 ケアギバーとしての役割と共生社会への道
3. 学会等名 看護経済・政策研究学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中津真美, 廣田栄子
2. 発表標題 通訳の役割期待に基づくCODA (Children of Deaf Adults) の親子関係の検討
3. 学会等名 日本聴覚医学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>CODAのページ http://marblemammy.wixsite.com/coda-and-parent</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考